

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』(第三十六～四十章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres XXXVI–XL) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.64 (2017. 3) ,p.151(38)- 168(21)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20170331-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』

(第三十六〜四十章) (翻訳)

山本武男

これまでのあらすじ

時は十九世紀半ば、パリ近郊のブルジョワ一家の「家族の肖像」。主人公の結婚適齢期を迎えた末娘ルネは、幼いころから自分を溺愛してきた父親を恋人の様な感情を以て慕い、何度となくお見合いの相手を断ってきた。彼女は父親以上の理想の男性はいないと思ひ込み、結婚しないと決めているのだ。一方、ルネの兄のアンリは富豪の妻ブルジョ夫人に接近、その愛人となりながら同時にその娘ノエミの恋人となり、母親にその娘との結婚を認めさせるに至る。結婚の条件として出された貴族の名を獲得するのにも成功した。が、家系が途絶えたかに見えていたその名を名乗る貴族の末裔が生きていて突然、アンリの前に現れた。そして見る見るうちに二人の間で名誉を争う決闘が行われることとなった。物語は、時にサロン小説としての一面を見せ、当時の社会についての議論が交わされる。第三十章では、ブルジョワ革命が生み出

した社会を是とする富豪ブルジョア氏と、その先の革命を求める青年ドノワゼルの間の論争が見られる。十八世紀から十九世紀にかけて複数の革命を経験した、言わば革命の「現場」に暮らすフランス国民の「生の声」をここに感じ取ることが出来る。

〔翻訳〕

三十六

その日の夜、ドノワゼルはモブラン家の客間に入るや、何時にない陽気さを感じ取った。みんなの顔には幸福の色が広がっていた。モブラン氏の機嫌のよさにはこやかな茶目っ気に現れていた。モブラン夫人の表情には、何かしら緊張の緩んだ感じ、晴れ晴れとした思い、内に秘めた至福を見て取ることが出来た。ルネは客間の中を跳ね回っていたが、持ち前の若い娘らしい敏捷さのせいで、一羽の鳥の様であり、その動きや生命力、殆ど羽の音までをも身近に感じるほどであった。

「ほうら！ ドノワゼルのお出ました……」とモブラン氏。

「コンチハ！」ルネが子供じみた声で言った。

「アンリと一緒になかったのかい？」

「今日は来られませんでした……あさってには来るでしょう……間違いない」

「ありがと！ ああ！ 今夜、おいでくださるなんて、ほんと、お茶目！」ルネはまた話し掛けると、子供を笑わせるときにする類のからかう様な仕草をした。

「やあ、君は、相変わらず気儘な暮らしをしているね！……ああ！ 元気そうだな……」

そう言って彼と握手したモブラン氏は妻の方に向かってウインクした。

「そうそう……ちょっとこちらへいらして、ドノワゼル」とモブラン夫人が言った。「そこにお坐りになって、お話しすることがあるから……先日、森であなたが小さな四輪箱馬車に乗っているとき、中で誰かと出会ったと思っけれど……」

そう言って彼女はミルクを飲む雌猫がするように、そこで一息ついた。

「ほら、君のお母さまのおしゃべりが始まりましたよ！」モブラン氏はルネの注意を引いた。「私の妻は、今日はとても陽気なんだ、お知らせしておこう、ドノワゼル！」

モブラン夫人は声を低めた。ドノワゼルの耳元に身を屈めると、かなりきわどい話をした。忍び笑いで切れ切れになった言葉の半分くらいだけが周囲に漏れ聞こえていた。

「ママン、そういう、隅で笑い話をするのは禁止よ……あたしにも教えて、ドノワゼルさん……そうでなかったら、あたしもパパに色々お話ししてしまうから……」

「酷いでしょ！ 何て馬鹿げた事なんでしょう、そう思わない？」モブラン夫人は話し終わると噴き出しながら言ったが、その笑いは、やや自由な小話に興じる老婦人らしい魅力のあるものだった。

「今晚はまた皆さんがた、随分陽気でいらっしやるのですね！」部屋中の歓喜に怖気付いたドノワゼルは思わず口走った。

「パンシヨンの絵みために陽気でしょ！」ルネが言った。「こういうのが、我が家の流儀なのよ……だからあた

私たちはこんな風に、明日も……その後も……何時までもずっと陽気！　そうよね、パパ？」　そう言って父親の方へ駆け寄ると、まるで幼女の様に膝の上に坐った。

「いい子だ！」　モブラン氏は娘に呼び掛けた。「ほら！　ちょっと見てみたまえ、君、思い出すかね？　この子が小さかった頃、何時もこの膝に坐っていたものさ」

「そうでしたわね」　モブラン夫人が言った。「で、アンリがもう一方の膝に乗っていたものでしたわ」

「そうだ、昨日のこの様に思い出すよ」　モブラン氏が続けた。「アンリは少女のようだったし、おまえは、ルネは、少年の様だった……あれから少なくとも十五年は過ぎてしまったというのだから驚くね！　おまえの小さな手を広げさせておいて、その指の間を棒で素早く突いては元の位置に戻って、また次の指の間を突いて、そう言う運動を繰り返し返すと、おまえは随分喜んだものだった……子供なんて他愛もないものさ！　それを見て、皆笑っていたな！」

そう言って、モブラン夫人の方を向くと「やはり、君、子供たちには君も苦勞した事だろう！　それでもいいものさ、なあドノワゼル、家族っていいだろう、やはりね、愛だよ、子供たちを育てるものは、誓って言うよ！」と付け加えた。

「あら、あなた、こんな所にいたの」とルネ。「あなた、逃がさないわよ、ドノワゼル……あなたの部屋は、大分前から主人のお帰りを待っているわ……」

「申し訳ないのだが、ルネちゃん、本当に……今夜はパリで仕事があるものだから……信じてくれよ、本当だから！」

「あら！　お仕事なの！……　あなたが？　きざねえ！……」

「居てくれよ、なあ、ドノワゼル」　モブラン氏が言った。「妻がね、君にたくさん話したいことがあるんだ、今

夜、さつきひとつ話したろう……」

「だから！ 居て頂戴よ、ねえ？」とルネ。「楽しみましょうよ、さあ！ あなたに歌わせる為にピアノを弾いたり絶対にはないから。サラダにお酢を入れ過ぎたりもしないわ。厳格さにこだわらない駄洒落でも作って遊びましょうよ……そうしましょう、ドノワゼル？」

「分った……でもそれは来週だ」

「ひどい人！」そう言つてルネは彼に背を向けた。

「ならダルドワイエは」とドノワゼル。「今夜は来ないのでですか？」

「うん！ 彼は来るよ」とモブラン氏。「でも今後は来にくくなるかも知れんなあ……彼は土木事業をしていて、地取りで多忙を極めている……庭園の山の位置と湖の位置を交換しようとしているところだと思つてよ……」

「そうはいつでも！ だって、夜は空いているしよ？」

「そうね！ 夜は、どうしてるのか知らないけれど」とルネ。「ダルドワイエさんて、謎の多い人よ……でも何て変な顔しているの？ 今夜のドノワゼル」

「ぼくが？」

「そうよ、あなたがよ。何時ものひょうきんな所がないわ、だってあなた、ぜんぜん弾けた感じがしないもの。何でそんなに心配そうにしているの？」

「ドノワゼル、何かあるのね」とモブラン夫人が言った。

「いや、何もありません、奥さま」とドノワゼルは答えた。「何かあつて欲しいみたいですわね？ ぼくは、ぜんぜん悲しくなんてないです……ぼくはただ疲れているだけなんです……だって、一週間に互つて、アンリがぼくを使い走りに使つて……、彼の室内装飾にはくの趣味を生かしたがつた結果なんですから……」

「それは本当ね」とモプラン夫人、もう顔は喜びに輝いていた。「本当に、段々近付いて来るわね……二十二日!……ああ! 二年は心の準備が必要だわ!……当日は、幸福な気持ちになり過ぎてしまうのではないかと思つて、わたし、怖いわ! そうして、孫が出来たら、ねえ、あなた?……」祖母としての彼女の将来を眼前に彷彿としながら、彼女はゆつくりと半ば目を閉じた。

「あたし、お母さまの後ろで引き立て役になるの、嫌だわ!」とルネ。「あたし、美しく着飾つてやるんだから、そうでしょう、ドノワゼル! あたし、ミサ用に一着ドレスを持つているんだけど……昨日、試着させられたの……似合うのよ!……ところで、ねえ、パパ、着て行く服はおありなの?」

「新品同然の古い服ならあるよ……」

「あら! ひとつ、お作りにならればよろしいじゃない……そんなのよりかもっと新しいのを……あたしに腕を貸してくれる為に……ああ! あたし、ばかだわ、パパが腕を貸すのはあたしじゃなかった……ドノワゼル、あなたをコントルダンスの為に予約しておくわ……あたしたち、舞踏会を開催しようと思つているの、そうでしょう、お母さま?」

「舞踏会……それだけにしておいてね!」モプラン夫人が言った。「多分そう言うことをすると俗っぽいと思われるでしょうけれど、まあ、いいでしょう! わたしはね、本流の結婚式を望むわ……婚礼のあと皆で帰つてくるの、私たちが結婚したとき、うちでしてみたみたいに、覚えているかしら、あなた? 踊つて、食べて、飲むの……」

「それよ!」とルネ。「うちの労働者みんなを酔わせてしまいましょ!……それからドノワゼルもよ! 酔つ払つたら、彼、多分、陽気になるわよ……」

「まあ、それらの事はさておき、ダルドゥイエは来ないようですね」と言つてドノワゼルが立ち上がった。

「今夜はまたどうしてそんなにダルドゥイエに会いたがるんだい？」とモブラン氏が訊ねた。

「本当にそうよ」とルネ。「分らないわ……説明してよ、ドノワゼル！」

「物見高いんだね、ルネは！ つまらないことさ……何でもないんだよ……明日、ぼくのサークルで鼠と戦わせる為に、彼のブルドッグを貸してもらえたらと思っっているんだ……ブルドッグが二分間で百匹絞め殺す事はぼくは賭けたんだ……話しはこれ位にして、ぼくは行くよ、さよなら！」

「さよなら！」

「それじゃあね、あなた……あさつてね、確かに来られるんでしよう？」ドアのところモブラン夫人がドノワゼルに言った。

ドノワゼルは返事をせず会釈した。

三十七

村の外れまで来て、ダルドゥイエの小さな家に到着すると、ドノワゼルは呼び鈴を鳴らした。年配いた女中が出て来て戸を開けた。「ダルドゥイエさんはもうお休みですか？」「彼がですか？ いえいえ！」女中が言った。

「お楽しみの最中ですよ……お庭をあちらこちら散歩しておられます、お見付けになられる筈です」それから彼女は食堂の床まである両開きの窓を開けた。

はつきりとした月明かりが、いっさい草木がなく、ハンカチのように真四角で、畑のように鋤き返された庭に落ちていた。隅にある小さな丘の上に、腕組みをしたまま動かない黒い人影が佇んでいたが、まるでピアールの絵のなかに出て来る幽霊と間違われ兼ねない姿だった。それがダルドゥイエ氏であった。

彼は非常に考え込んでいたので、ドノワゼルが傍まで寄って行ったとき、初めてその存在に気付いたのだった。「ああ！ あなたでしたか、ドノワゼルさん」彼は口を開いた。「恐れ入ります……ご覧下さい！」そう言っ
て彼は掘り返された土地を友人に示した。「何か言っ頂けますか？ あなたのご意見を、これに就いて。輪郭
は出来ていますでしょ、そうだといいいのですが。なだらかな、ぼやけた感じにした積もりなのですか、どうす
か……」

そう話すとき幸福そうに手を空中にかざしつつ、理想的な形の女性の尻を愛撫するような仕草で、計画が実現す
れば丘がどういいう様相を呈するかを説明した。

「ダルドゥイエさん……申し訳ありませんが」ドノワゼルが切り出した。「私が参りましたのはある用事の為で
して……」

「月明かり……万一、あなたが庭をお持ちになるとときには、思い出してください……自分のしていることを見
る為にはこれしかないのですよ……しかも正確に見る為にはですね……日の光だと、土盛りの具合が把握しきれ
ないのです……」

「ダルドゥイエさん、あなたが嘗て軍服を着ていた人としてお話し申し上げますが……あなたはモプラン
家とは関わりがありますね……あなたに、アンリの証人になって頂くことをお願いしたくて私は参ったのです
……」

「決闘ですか？」そう訊ねてダルドゥイエは冬同様、夏も着ている黒い背広の金属製の釦をひとつ締めた。
「勿論！」彼は続けた。「そういう手助けをするのは、正当な事です……」

「お連れ致しますよ」と言っつてドノワゼルは彼の腕を取った……「私の家でお休みになってください……そ
の方が、ことが早く進む筈ですから……明日終る予定ですが、遅くとも明後日までには片が付くでしょう」

「結構です！」ダルドゥイエはそう言ったが、後悔のこもった視線を、地面に打ち込み始めた、月の光が影を引かせている杭の列に注いでいた。

三十八

アンリ・モブランの家を出ると、ヴィラクール氏は自分には友人も証人もいないことに思い至った。その時まで、その点に就いては考えもしなかった。父方の家族の歴史の中に現れる二三の名を思い出した。少年時代、パリを訪れた際、連れて行って貰った何軒かの家を、通りの名を頼りに見付け出そうと努めた。館の戸を敲いて回ったが、主人はことごとく入れ替わっており、迎え入れる者はなかった。

夜になれば、そんな彼は家具付のホテルに帰るのである。嘗てこれほどの孤独を感じたことはなかった。部屋の鍵を受け取る時、宿屋の女主人は、自家製のビールを飲みたくないか訊ね、それから通路の戸を開けて建物の一階にあるカフェに導き入れた。

壁の外套掛けには、数本の剣が下がっていて、三角帽も幾つか掛かっていた。店の奥にはパイプの煙越しに、玉突き台の擦り切れた布の周りを軍服姿の男たちが行ったり来たりしているのが見えていた。白い前掛けをした背の低いひ弱なギャルソンが、小型のコーヒー茶碗から溢れ出て、それを乗せている皿の上に溜っていたコーヒーを陸軍新報紙の上に零してしまい、気もそぞろに狼狽した様子で駆けていった。

カウンターの傍では、軍楽隊の鼓手長がカフェの主人と互いにシャツ姿で西洋すごろくをして遊んでいた。店の中のあるところから、話し掛けたり答えたりする声が、兵隊たちの話し方に独特のあの轟きを伴って行き交っているのが聞こえてきた。「明日は俺、芝居日和……俺は、さつき週給を受け取って来た……」ガブ

リオの奴は今、サン・シユルピスで教会守衛をしているぞ！——あいつは閱兵式に推されて出ていたなあ……
——ブルドンの舞踏会で、勤務するのは誰だ？——考えられるか？——あいつの人事記録の件で何のお咎めもないとなれば、軍規は終りだぜ！」

彼らは皆、パリの衛兵で、隣の兵舎に居住している者たちであり、九時の召集を待っているところであった。

「ギャルソン！——ポンチ一瓶とコップを三つ持ってきてくれ！」そう注文すると、ヴィラクール氏は二人の衛兵がいるテーブルの前に腰掛けた。

ポンチが届くと、三つのコップをそれで満たし、各々の衛兵の前に一つずつ置いて、呑むように勧め、自らは立ち上がって、

「お二方、あなた方の健康を祝して！」と言って自分の杯をかざして二人に目礼した。「あなた方は軍人さんですな……わたしは明日、決闘するのですが……ご迷惑はお掛けしません……誰も知り合いないのです……ですが、ここ二人が、わたしの証人となってくれるように思えてならないのです」

「いいんじゃないか？——なあ、ガイウルド」衛兵のうちの一人が、ヴィラクール氏の目をじっと見たあと、仲間間のほうを向いて言った。言われた方は返事をせず、自分のコップを手に取るや、それをヴィラクール氏のコップに当てた。

「それじゃ！——明朝、十時に……部屋番号は二十七……」

「合点！」と衛兵たちは答えた。

翌朝、ドノワゼルがダルドゥイエと一緒にボワジョラン・ド・ヴィラクルの家を訪れてみると、呼び鈴を鳴らして、二人のパリの衛兵が入っていくところであった。彼ら四人の使命は、条件、武器、距離等々の全てを承認することで、決闘はやがて取り決められた。拳銃を用いての決闘であり、三十五歩離れ、相手に向って十歩まで近付く事が出来るという内容に合意した。ドノワゼルが、アンリの名の下に、事はなるべく早い時刻に済ませたい旨申し出ると、それはヴィラクル氏の証人たちが要求するところでもあり、興行を見に行くという口実で外出許可を得ていた為、夜半までしかヴィラクル氏には付き添えないと言うのだった。ヴィル・ダヴレの池で、四時に待ち合わせることに話が決った。

ドノワゼルは友人の一人の若い外科医に知らせようと駆けつけた。またある貸し馬車屋に行つて、怪我人を運搬するのに相応しい様な揺れが少ない上質な馬車を一台予約した。アンリの家に寄つてみると、彼は外出していた。射撃場に急行したところ、アンリはいて、四五本のマツチを小さな束にし、幾つかそういうものを一本の紐に吊し標的にして打ち、弾丸が硫黄に触れて発火するのを面白がっていた。

「ああ！ こんなことしたつて、何の意味もないね」彼はドノワゼルに言った。「弾丸が通過するときの風で発火しているんだとぼくは思うんだ、ほら……」

そう言つて友人に、ついさつき一番小さな円の中に十二個ほどの弾丸を通したばかりの厚紙製の標的を見せた。「今晚……四時ということになった……君が望んでいた通りさ」ドノワゼルは友人に告げた。

「ああそう」アンリは拳銃を用人人に預け、標的の上の他の穴からは少し離れた所に空いている二つを指で塞ぎながら言った。「おい、この離れた二つが無かつたら、額縁に入れて飾つたつていい標的だよな。ああ！ ぼくは嬉しいよ、ことが今日になったんで……」

それから彼は射撃に慣れている者がその準備の際しばしばするように、腕を挙げ、血を下げる為、僅かのあい

だ手の平を振った。

「想像してみてくれたまえよ」彼はまた喋り出した。「決闘するんだ、と云う思いは、漸く今朝、寝台の上で初めて強くなったのだが……あの横臥しているときの姿勢……あれが勇気を挫く様にぼくは思うんだ……」

ドノワゼルのうちで昼食をとり、それから煙草をふかしました。アンリは陽気で、感情を表に出し、よく喋った。外科医が到着した。総勢四人となり、彼らは馬車に乗り込んだ。

途中、それまでは沈黙を守っていたアンリが、何かこらえ難い風の仕草でドアの窓越しに葉巻を捨てた。

「葉巻を一つ呉れ、ドノワゼル、良いやつを……射撃をする為には、良質の葉巻を吸っておくことが大変重要だ……」
 だつてことを、君は知っているか？ 上手に打つ為には、苛々してはいけない……それが第一条だ。ぼくは今朝、真っ先にひと風呂浴びたよ……少しの精神的な動揺もあつてはならんからな……そうだ！ 馬を御するなんてのは、忌避すべきなのだ……馬たちがひどく手に負担を掛けさせるからね……その後では、真っ直ぐにはとても撃てまい……指の痛みが取れないから……小説の中では決闘の場面で馬鹿げたことをやっているね、到着するや自ら取ってきた馬車の手綱を召使に投げ渡したりするでしょ……もしぼくが、元気を回復する手立てはないか、なんて訊ねたら、君、どうする？ だけどね、これはいたって現実的な問題なのだよ……ぼくはあるイギリス人が射撃するところを見たことがあるが、あんな見事なのは他に見たことがなかった……でもね、その男は八時に寝るんだとさ……精神的に昂ぶる事は決してないということだ……彼は毎晩、ゆつくりと短い距離を散歩するのだそうだ……がたがた揺れる馬車に乗って射撃場に行ったときには何時も標的の結果にその影響が出たものだった……ところで、とても乗り心地がいいね、君の馬車は、ドノワゼル……それを言うなら、葉巻についても同じことが言えるね、燻らしにくい葉巻の場合、そこで工夫をしなくてはならない、何時も口元に持つていなくてはならないから、手がしんどくなる。一方、良い葉巻は射撃者に訊けば教えてくれる、それは心を静め、

神経を良好な状態にしてくれるからだ……一定の間隔で、葉巻を口から外したり、また口に銜えたりするリズム以上に効果的なものは無い、ゆっくりと、規則的なところがいいのだ……」

一同は到着した。

ヴィラクール氏とその証人たちは、二つの池に挟まれた土手道の上で待っていた。

地面は午前中降り続いた雪のせいで真っ白だった。森は枯れた枝を天に突き立てていて、遠く、黒い木々の列は冬の赤い夕日を遮っていた。

一行はモンタレの道まで出た。歩数が数えられ、ドノワゼルの拳銃に弾が充填され、敵対する二人は直線上に立つて向かい合った。雪の上に置かれた二本の杖は各々が近付く事が出来る十歩までの距離を示していた。

ドノワゼルがアンリを籤で割り当てられた場所へ連れて行ったとき、ドノワゼルがシャツのカラーの端がネクタイから出過ぎているのを隠してやると「ありがとう」とアンリは低い声で言った。「腋の下でちよつと胸が高鳴っているのが分るが……君を喜ばせることが出来そうだよ……」

ヴィラクール氏はフロックコートを脱ぎ、ネクタイを引き抜き、それら全てを遠くに放り投げた。大きくはだけられたシャツから、強そうながつちりとした胸が見えており、それは黒や白の胸毛に覆われていた。

決闘をする二人は各々武器を持ち、証人たちは離れたところへ行つて、同じ側に整列した。

「歩いてくださいー」と証人の一人が叫んだ。

この一言を聞いて、ヴィラクール氏は前に出て、退くことなく歩いた。アンリは動かず、相手に五歩進ませておいて、六歩目に撃った……

ヴィラクール氏は崩れ落ち、地面に坐り込んでしまった。

証人たちは、そのとき撃たれた者が拳銃を置き、力強く左右の手の親指で腹をまさぐりつつ弾丸が作った大き

な穴を押さえ、それからその両の親指の匂いを嗅ぐのを見た。

「血の臭いがする！俺の負けだ！……あなたの望んだ通りになりましたぞ！」力強い声で叫んだので、全て終わったと思ったアンリは立ち去る仕事をしたが、相手はピストルを拾いあげ、手足で這いながら杖の置かれてある所までの残りの四歩を進み始めた。雪の上には、彼の進んだ後ろに血痕が続いていた……杖のある所まで来ると、肘でその身を支えつつ、ゆっくりと時間を掛けて照準を定めた……

「おい、撃てよ！」ダルドゥイエが叫んだ。

アンリは退き、銃を顔の前に構えて、待った。彼の顔面は蒼白であったが、目は誇りに満ちていた。銃声が響いた、すると彼は一瞬よろめき、それから、ぱったりと倒れたが、顔は地面に付き、伸びきった両腕の先の手は一瞬、小刻みに震える指で雪を掻き取るうとした。

三十九

モブラン氏は、朝起きぬけに、習慣通り庭に下りたが、そのとき彼の方に向って来るドノワゼルを認めた。

「こんな所に君が、こんな時間に？」全く驚き切った様子で言った。「何処にお泊りでしたか？」

「モブランさん……」ドノワゼルは彼の両の手を握り締めながら言った。

「どうしたんだね？……何かあったのか？」不幸を直覚したモブラン氏が言った。

「アンリが傷を負いました」

「命に関わる程なのか？ あいつ、決闘でもしたのか？」

ドノワゼルはうなだれた。

「怪我じゃないのか?……ああ! あいつ、死んでしまったのか!」

ドノワゼルは何も言わず、返事の代わりにモブラン氏の両腕の間に飛び込み、彼を抱き締めた。

「死んだ!」モブラン氏は機会的に繰り返して、その両の掌を、何かを手放すかのように開いた。それから、喋ると同時に涙が込み上げてきた。「じゃあ、あいつのかあさんはどうなるのだ!……アンリよ!……ああ! 何でことだ!……ああ! どれ程まで、あいつは愛されていた事か……三十歳で逝ってしまおうとは!」

すすり泣きにむせびつつベンチの上にくずおれた。それから少しして、「あいつは何処にいる?」

「そこです……」と言ってドノワゼルはアンリの部屋の窓を示した。

ヴィル・ダヴレから彼は遺体をダルドウイエの家に運び込み、そこで夜のうちに、ある口実を設け、モブラン氏が家の鍵を渡してあるベルナル氏を呼び寄せ、真夜中になって家族が寝静まった頃、靴を脱いだ三人の男は亡骸を彼の寝台に安置したのであった。

「ありがとう!」モブラン氏は彼に礼を言うと、これ以上は何も話せないといった意思を伝える仕草をして立ち上がった。

そうして二人は黙りこくったまま、各々、四周も五周も庭を歩いた。再三再四、モブラン氏の目に涙が滲んだが、然しもう声を立てて泣くことはなかった。時折、唇の先が何かを喋ろうとするかの様に動くのだが、言葉をもた呑み込んでしまう風であった。結局、上ずった、しかし低い声で、この長い沈黙を破ろうと努力している感じだ。モブラン氏は突然、ドノワゼルに、彼のほうには目を向けず、語りかけた。「あいつの死に様は、良かったかい?」「あなたの息子さんですから」とドノワゼルは答えた。

この一言に、父は恰も苦悩を取り除く力が湧いてきたかの様にこうべを上げた。「わかるだろ」彼は言った。

「今となっては、あいつが勇敢に戦ったかどうかが重要なのだ……君は、君は良くやってくれた……」

彼はドノワゼルを自分の胸に抱き締め、その髪を涙で濡らした。

四十

「こう云うのは、殺人だよ！」墓地に向う遺体に随行しながら、バルースがドノワゼルに言った。「なんで事を丸く収めなかったんだい？」

「一発張り手をくらった後で出来ると思いませんか？」

「そう云うことには、前も後もないよ」バルースは敢然と言いつ返した。

「そんな話は彼の父親に言つてください！」

「ああ！ 勿論さ、大将！……だけどな、おまえ、畜生！ おまえは何の役にも立たなかったじゃないか、それどころか、おまえはあいつが殺される様に仕向けたのだ！……だってな、俺に言わせれば、あいつを殺したのは、お前なんだからな……」

「止めてください！ わたしをそつとしておいてください、バルースさん」

「わたしは、分るだろう、推理しないわけにはいかないんだ……わたしは司法官をしていたんだからね……」バルースはかつて商事裁判所の裁判官をしていたのであった。「だから！ 決闘ということになった場合には……裁判という手があるじゃないか、司法に訴える、それだけで十分じゃないか！ それに決闘は、あらゆる宗教上の戒律や生活していくうえでの規範にも反するものだという事を、よく思い描いてくれたまえ！ 分らせてやろう！ ここにある悪党がいて、わたしの両の頬を張ったとする……そうして更にこの男はわたしを殺さなければならぬのだとする！ ああ！ わたしはおまえに或ることを確言しよう……万一、わたしが誰かの仇であ

ると宣誓されて、その相手が決闘沙汰にわたしを引き込んだ場合……わたしに言わせれば、それは殺人だ……決闘者と云うものは、殺人者だ……第一に、それは卑劣な行為である……」

「バルースさん、誰もが、決闘をする勇氣を持つている訳ではないのです……あれは、自殺みたいなものですよ……」

「おい！ もしおまえが自殺を擁護するなら許さないぞ！」とバルースは言ったかと思うと議論をそこで投げ出し、胸がいつぱいになったらしい調子で話を再開した。「とても良い青年だった……可哀想なアンリ……それにモブラン、その妻、その娘、家族全体が涙に沈んでいる……まったく、それを考えると、いても立ってもいられなくなる……わたしの知っていた子供が、あんな最期を迎えてしまうなんて……」

バルースはそんなことを言いながら、チョッキから時計を引っ張り出した。「さて！」彼は突然話を中断して言った。「あれ、売れてしまうだろうなあ、間違いない……競売には間に合いそうにないな……一枚、「演奏会の聴衆」という素晴らしい版画が出ることになっているのだ……市販される前の試し刷りなのだが！」

ドノワゼルがラ・ブリシュにモブラン氏を送り返すと、氏は到着するや否や妻の部屋のある階上へと向った。彼がそこで見出したのは、寝台に横たわり、雨戸を閉めてカーテンを引き、苦悩の闇のなかに沈み込んで憔悴しきった妻の姿だった。

ドノワゼルが客間サロンに入ってみると、そこではルネが円筒形のクッションに腰掛けて、口にハンカチを当ててすすり泣いていた。

「ルネ」ドノワゼルは彼女の両の手を掴んで声をかけた。「兄さんが殺された……」

ルネは彼を見、そして目を伏せた。

「あの男は何も知る由もなかった筈だ……何も読まず、人にも会わず、こっそり一人で生活していた奴なんだ……モニター紙を定期購読していた訳でもないんだろう？　ほくが言っている意味、分るよね？」

「分らない」ルネは口籠った。

彼女は小刻みに震えた。

「それなら説明しよう！　アングリの敵がああ男にああ新聞を与えたに違いないのだ。ああ！　そうなのだ、こんな卑怯な手口、君には分るまい、君には！……しかし、ことはこんな風に済んでしまった……あの男の証人のうちの一人はあそこで下線が引かれた新聞をほくに見せたんだ……」

ルネは立ち上がって、恐怖に目を大きく見開き、唇が動き出し、口が開いて彼女は叫ぼうとした。「あたしが！……」それから突然、瞬時に負傷した者のように心臓に手を当てたまま、固くなって絨毯の上に倒れた。

当翻訳は以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Mauperrin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p. 208-220.